

住民無視。市長公約の住民がど真ん中はどぐろ消えたのか 大島区町内会長連絡協議会が総合事務所のあり方検討で要望書

大島区町内会長連絡協議会（岩野実会長）がこのほど大島区地域協議会（石塚隆雄会長）に要望書を提出しました。総合事務所のあり方についての検討は、もともと大島区内の現状や住民の意見を尊重して検討しよう、市に強く働きかけてほしいという内容です。

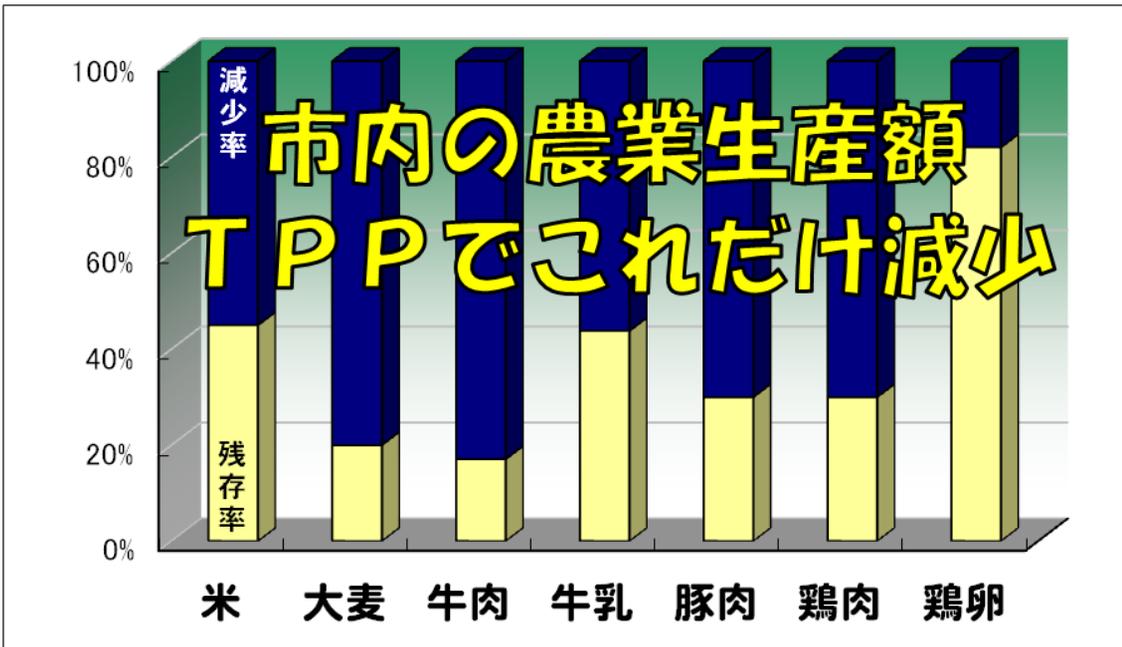
この要望書は先月28日に行われた大島区町内会長会議で出された意見をもとにまとめたもの。要望書には、「大島区は、高齢者が多く、豪雪地のうえ災害が多く、地元で専門の職員がいなくなったとき、最も大事な初動の対応ができるのか」「大浦安をモデルとする理由は何か。やり易いからモデルにするのか」「行政サービスが落ちることではないとの説明ならば、大きなブロックで実施すれば効果が大きい」



大島区仁上にて撮影

「市全域で同時に実施すべき」「今日、3か月前には住民無視もはなはだしい。市長公約のど真ん中はど真ん中に消えたのか」「住

民への説明もなく、意見も全く無視したことは絶対反対をする。このままでは住民の反対運動が拡大する」「市長の説明、または住民の声を聞く公聴会の開催を強く望む」「町内会長の立場で、町内会の住民に説明ができない」などの意見が書き込まれ、「現在の状況下ではこの



12月議会の私の質問で市は、TPP（環太平洋経済連携協定）に日本が参加した場合の市の影響額を明らかにしましたが、このほどその影響額についての詳しいデータを入手しました。上のグラフはその数値に基づいて作成したものです。

上のグラフをご覧の通り、なんとかおおかたが残りそうなのは「卵」だけ。米は、コシヒカリなどのブランド米の生産が多いためにかなり残りそうですが、それでも45%です。農水省ですら、半分以上の水田で米が作れなくなることを予想しています。

半分以上の田んぼがなくなるということは、特に中山間地の田んぼが壊滅してしまうということになります。そうすると、これまで私たちの水源として、そして災害防止の砦として大きな役割を果たしてきた田んぼがなくなってしまうということにもつながります。

昨年6月に制定された「中山間地振興基本条例」は、中山間地が私たちに大きな恵みをもたらしてくれていることをうたいあげ、大切にしていこうという思いが込められていますが、その思いをふみにじって、多国籍企業だけの儲けのために、私たちのこのふるさとを荒地だらけにしてしまうのが、TPPです。

試行計画には絶対反対していくことに至りました」とあります。こうした要望書は安塚区でも提出されていることはすでにお知らせしたとおりです。行政主導で進めてきたことのつけがここに来て一挙に噴き出した感じになりました。市では、今週中には大島、浦川原、安塚区の地域協議会の幹部と話し合いに入りたい意向のようですが、今回の動きの底流には地域事業費制度の見直しなどへの不信感が横たわっています。簡単には解決への道が開けないでしょう。関係住民の声をもっとしつかりと聞くべきです。

わずか三分。でも、この三分があるから平和な一日になるのではないか。吉川区原之町地内の三叉路で、毎朝月曜日から金曜日まで交通誘導をするWさんの姿を見て思ういました。

Wさんが自宅を出て三叉路へやってくるのは午前七時二五分ころです。フリッカー（誘導棒）を左手に持ち、オレンジ色の安全ベストを着て三叉路に立った瞬間から、この空間のムードが緊張したものに替わります。Wさんがこの場所で交通誘導をしているのは、小中学校へ通う児童生徒を交通事故から守るためです。

一月一〇日の始業式の日。子どもたちがやってくる前にWさんに声をかけたら、「ここは事故が起きやすい場所なんだわ」という声が返ってきました。信号機のない三叉路ですので、自動車の運転では進むか止まるかの瞬時の判断が求められます。冬場は、路面に雪があつて滑りやすい状態のときもあります。確かに、交通事故が起きやすい場所だと思えます。

午前七時三〇分、山方面から一列になつてやってくる子どもたちの姿が見えると、Wさんは横断歩道をすつと渡り、待ちます。もうすつと交通誘導をしているので、子どもたちにはすつかりおなじみのWさん。久しぶりに小学校の子どもたちから「おはようございます」と声をかけられ、とてもうれしそうでした。

横断歩道を渡る直前、Wさんは左右の車の流れを見ながら、子どもたちを守るようにフリッカーを横にして車を止め、子どもたちを通します。渡り終わったところで、Wさんは小学生たちと別れます。横断歩道の一方に行き、子どもたちが渡りきるまでにかかった時間は、ほんの三分でした。

Wさんの交通誘導の「仕事」はこれで終わりですが、自宅までは中学校へ行くY君と一緒に歩道を歩いて帰ります。Y君に「おめでどうございます」と言われたWさんは、彼の肩をたたき、頭をなでて一緒に歩いていました。WさんとY君はおそらく五〇以上も年が離れているはずですが、これまでもこうして一緒に歩いていたのでしょいか、二人が歩く後ろ姿は楽しそうな雰囲気が出ていて、まるで同年代の友だち同士のように見えました。

Wさんは私が青年時代から付き合いをさせていた人です。私が二七歳で町の農業委員になった時も一緒でした。夏場は町の中心部で稲作を行い、冬になると、近くの造り酒屋で杜氏の仕事をしておられました。長身で、きりつとした身なりをされていたこともあつて、近寄りがたい人のように見えました。その一方で、「おれ、いま上州から帰ってきたところだ」などと言つては仲間の農業委員を笑わせる人もありました。

私がこれまでWさんにたいして持っていたイメージのなかには子どもたちを守る姿はありませんでした。いつも仕事一筋で、テキパキと仕事をこなしているか、犬と一緒に散歩している姿くらいしか思い浮かばなかったのです。でも、交通誘導をされている姿を見て思いました、この人は元々、子どもたちにやさしい人だったんだ、と。子どもたちが学校へ行ったあと三叉路は再び車が通るだけとなりました。時々、ブレーキ音や走り抜ける音がするくらいで、小鳥たちの鳴き声もしません。ほんとうに静かな一日の始まりです。

※原之町、下町には、こうした交通誘導をされている人がまだ数人おられます。

城ばかり攻めていた謙信の戦い、生き方を小島幸雄さんが熱弁

吉川区原之町の品和亭で行われた謙信勝負飯で新潟県文化財保護指導委員の小島幸雄さんが講演、上杉謙信の戦いと特徴、受験の心構えなどについて語りました。



小島さんは、花ヶ前盛明さんの著書、『上杉謙信のすべて』を紹介しながら、「謙信公は約70回の戦のうち、43勝2敗25引き分けだったが、戦の仕方はちょっと変わっている。お城ばかりを攻め、城の人たちが降参するのをじっと待つという戦をした。殺し合いを好まなかった武将だ」などと謙信の戦いについて語りました。

また、小島さんは受験そのものについてもふれ、「大切なのはどこの学校へ行くかではない。どこへ行ってもどんな人と出会うかが大事だ」「受験は人とたたかうものではない。相手は自分自身であり、あれこれしたいという自分の欲望を抑えて、勉強していくように努力してほしい」と訴えました。

謙信勝負飯は上越青年会議所のメンバーが食による地域おこしをねらった料理で、「お茶漬け」もしく

は、そのまま食べた後に出汁をかけて食べることで、お米は上越産米を使うこと、食後、梅干しを食べることが約束事になっています。この日は品和亭特製の唐揚げなどを食べ、合格祈願をしました。

市内各地で冬まつり、サイの神

今年最初の連休、市内各地でサイの神行事などが行われました。私は吉川区川谷での冬まつり、代石でのサイの神行事に参加しました。



川谷では地元の人や法政大学関係者と一緒に餅を食べ、雪の中のゲームなどを楽しみ

ました。私の居住地、代石ではサイの神のあと、恒例のスミ塗りが行われました。私の良い顔も台無しでした（笑）。

